

『今月の天候と農作業』

通巻第5565号
3月号
平成26年 2月 28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【概要】

<特に注意を要する事項>

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 3月 1日(土)～ 3月 7日(金)

高気圧に覆われて晴れる日もありますが、気圧の谷や寒気の影響で、雲が広がりやすく、期間のはじめは雨が降るでしょう。※詳しくは、週間天気予報をご覧ください。

<2週目の予報> 3月 8日(土)～ 3月 14日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<3週目から4週目の予報> 3月 15日(土)～ 3月 28日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

間もなく田植え時期を迎えます。しかし春先は寒暖の差が激しいため、田植え直前の苗箱や移植後の苗に低温や強風による被害が常に発生しています。気象情報に注意し、防寒対策を徹底しましょう。

1 育苗管理

緑化期間は、通気性のある被覆資材で2～3日遮光し、温度管理は日中は25℃まで、夜温は15℃は確保しましょう。かん水は、午後に行うと床土温が下がり多湿となりますので、午前中のうちに行います。

硬化期間に入り10℃以下の低温や25℃以上の高温に遭うと、立枯れやムレ苗、苗いもち等が発生しますので注意します。田植え7日前頃から外気に慣らしていきます。

2 本田準備

低温時の深水管理や、肥料や除草剤等の効果の安定及び節水のため、畔の補修や排水口の点検を行います。水持ちの良くないほ場では、水温が上がりにくくなったり、苗が除草剤の影響を受けやすくなるので、代掻きを丁寧に行います。

3 基肥の施用

基肥を本田に全面散布する場合、あまり早い時期に施肥しておく、徐々に肥料分が減少していきます。できるだけ代掻き時に施肥し全層に鋤込みます。

4 病虫害防除

いもち病の予防のため、地区基準に基づき移植前に箱施薬を行います。薬剤が苗に付着したら葉焼けすることがありますので払い落とします。なお、共同育苗施設で既に薬剤処理されている苗箱もあるので、確認しましょう。

5 移植

田植え後の低温と強風の影響で、活着の遅れや葉枯れ、激しい場合は枯死に至る場合もありますので、寒波が予想される場合は、無理に移植せず日延べします。移植後に低温が予想される時は、深水にして苗を守ります。栽植密度（株間）が普通期水稲栽培並に広いところも一部見られます。早期水稲では寒害を受けると有効茎（穂数）、が不足し減収する場合もあるので極端な疎植とならないようにします。

6 本田除草剤散布

除草剤は、散布時期や量、水深の違いなどで効果が左右されます。薬害は軟弱苗の時や、強風時の散布で薬剤の吹き寄せ、浅水での拡散が不十分な時などに発生しやすくなります。ラベルをよく読んで適切に散布します。散布後、7日間は排水路に落水しないように止水管理します。

◆ 麦類

1 排水対策

出穂期を迎えますが収穫までの間には、多雨により湿害が発生しやすくなるので、排水溝を設けるなど排水対策を徹底し、降雨に備えましょう。

2 赤かび病の防除

開花期に雨が多いと「赤かび病」が発生しますので、出穂し始めたら農薬使用基準を守って防除します。防除時期は麦の種類によって異なり、裸麦・小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（葎殻抽出期）となります。さらにそれぞれの7日後頃に2回目を散布し、防除効果を高めます。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

3月に入ると、日増しに日射量が増え気温も高くなり、作物の蒸散量も多くなるためかん水量を増やしていきませんが、1回のかん水量を多くすると、通路の溜水等によりハウス内の環境や作業性が悪くなります。かん水間隔を短くするなど適量を多回数でのかん水とします。

また、日中は内カーテンや遮光資材を利用することで、日射量を調節するとともに、十分換気を行いハウス内の温度が高くなるように注意します。

夜間も気温が高い場合には内カーテンは開放し、ハウス内の適温管理に努めるとともに、加温機や循環扇によって送風を行い湿度低下に努めます。

◆ きゅうり

強い日差しにより葉温が上がり、蒸散量も多くなるため、葉の老化が早まるなど草勢低下につながりますので、午前中は内張ビニールを利用し、強光

線防止と湿度を確保します。また、ハウス内温度が32℃を超えると果色が淡くなり、果形も乱れやすくなるため、十分な換気に務めます。

◆ ピーマン

日中のハウス内気温が35℃を超えると開花時の授粉がうまく行えず、奇形果の発生や果実の肥大不良による赤果等の発生につながりますので、十分換気を行いハウスが高温多湿ならないようしてください。

気温の上昇とともに収穫までの日数も短くなるため、こまめに収穫することが草勢維持には重要となりますので、最低でも3～4日間隔での収穫に心がけましょう。

また、白果の発生も多くなりますので、混み合っている枝を整理し、光線が中まで入るように整枝・剪定を行います。

◆ トマト

ミニトマトは気温上昇にともない、裂果が多くなるので、かん水量に注意します。土壌水分の急激な変化がないように少量多回数のかん水を行います。また、空中湿度を下げるため日中の換気を徹底し、一日おきに収穫を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるのでかん水量を多くします。また、草勢が低下すると小玉果が発生しますので追肥が遅れないように注意します。

◆ いちご

温度は出来る限り生育適温に近づけ、低温管理をこころがけます。ハダニ類が平年に比べ多く発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

春夏野菜は播種期になります。直まきではほうれんそう、小松菜、ごぼうなど、育苗が必要なものでは、キャベツ、深ねぎなどがあります。作付計画を立てて適期に播種します。また、トンネル栽培では日中の気温が高くなるため換気作業を徹底しましょう。

◆ スイートコーン

トンネル栽培は間引きの時期となります。本葉4～5枚の頃に健全で揃っ

たものを1株に整理しましょう。マルチ内が乾燥する場合は畦間や株元へのかん水を行ってください。

また、ハウス栽培や大型トンネル栽培で、雄穂抽出期を迎えるものについては、雄穂が出始めたらチッソ成分で5～6キを追肥しましょう。

◆ らっきょう

上旬は追肥の時期となります。球の肥大と生育促進のためチッソ成分で2～3キ程度を遅れないように施用しましょう。また、球の緑化を防止するため併せて土寄せを行いましょう。

◆ さといも

マルチ栽培は早生種の植付け時期です。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋（30～50匁程度）を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

◆ 食用かんしょ

トンネル栽培では換気作業を徹底します。苗床については温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎ、健苗の育成に努めます。

◆ ばれいしょ

品種や種芋の月齢によって違いますが、芽数が多いと着生する芋数が多くなり、芋が小さくなりますので、芽が出てきたら早めに1株1～2本に整理します。

◆ しょうが

4月に植付け予定の普通栽培では、欠株をなくし生育を揃えるための催芽の時期となります。催芽は20日間程度行います。幅120匁、深さ15匁の溝を作り、種しょうがを2段重ねして並べ、吸水させたワラで覆い、10匁くらいの厚さに土をかけ、その上をビニールで覆います。なお、催芽は1匁以内とします。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用しましょう。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが効果的です。また、発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

今年は着花量が少ないことが予想されます。発芽後に、花の着生の無い枝を、前年枝の基部から除去しましょう。

◆ 完熟きんかん

収穫が終了したら、縮間伐・剪定の時期です。枝が隣接樹に当たりだしたら縮間伐を行いましょう。剪定は、樹勢や樹齢を考慮し、主枝、亜主枝の配置を考えながら、樹冠内部まで日が当たるようにしましょう。

近年、繰り返し剪定によって強い枝が発生し、実が着きにくい状況が見られます。剪定は、間引き剪定を基本として、短めの枝を多く確保し、繰り返し剪定は、樹勢の強化や枝作りの必要な場合のみとしましょう。

剪定の遅れは、枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くします。剪定は4月上旬までには終わらせましょう。礼肥やたい肥、石灰資材を施用し、新梢を発生させる時期を目安に、たぷりとかん水を行いましょう。

◆ 日向夏

3月に入ると露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生日向夏から収穫を開始し、在来日向夏は減酸を確認してから収穫しましょう。

◆ マンゴー

幼果期から果実肥大期には、薬害が発生しやすくなります。薬剤散布は、晴天日の午前中の、薬液が速やかに乾く環境下で行いましょう。また、果実の赤色の部分を増やすために、果実のつり直しを行い、緑色の側にも光を当てるようにしましょう。

3月になると、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。内カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

2 落葉果樹

◆ 桃

桃には非常に多くの花芽が着きます。良好な果実肥大のために、摘蕾を行いましょう。花芽が丸くふくらみ、赤みを帯びた頃に、横からやや下向きの

蕾を残します。このとき、30%以上の長果枝は中央部に6～7個、中果枝は3～4個、20%以下の短果枝は先端部に2～3個の花芽を残しましょう。

◆ 梅

開花期～展葉期にかけて病害虫が一斉に発生します。予防や初期防除を実施しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 電照ギク

3月になると日長が長くなり、中旬には12時間を超えてきます。花芽をスムーズに分化・発達させるために上旬からシェードを実施します。シェード時間は18時から7時まで暗黒とした11時間日長とします。一晩中シェードを行いますと高温、多湿になり病害等も発生し、品質が低下する恐れがありますので、夜間は開放して下さい。

親株育成用母株は品種本来の特性を備え、ウイルス病、センチュウ等の病害虫におかされていない健全な株を選定しましょう。

◆ 夏秋ギク

7月出荷作型の挿し芽を上旬から行います。挿し穂は無病で充実した揃いの良いものを晴天の午後に採穂します。「フローラル優香」は系統によって特性が異なりますので、系統特性を把握し栽培管理を行って下さい。6月出荷作型の「フローラル優香」は消灯前後を問わず生育期間全般での低温が貫生花の発生を助長しますので、電照期間中から気温を確保するように努めましょう。

また、「精の一世」については親株時の低温で幼若性を獲得している場合があるので、定植後から12℃程度で加温を行いましょう。

◆ スイートピー

今年は安定した収穫を後の異常高温により、草勢が低下している状況が見られます。植物の状態をこまめに観察し、適切な肥培管理で草勢の安定化を図りましょう。液肥の施用に当たっては、根を傷めないように高濃度の液肥の使用は避けましょう。

3月に入ると気温が不安定な日が増えてきますので、細やかな温度管理に努めるとともに、花卉の花しみや灰色かび病の発生を低減するため、十分に換気とともに、微生物農薬の使用や除湿のための送風を行いましょう。日射

が強くなり、気温も上がってきますので、ステムの長さが短くならないように、今までよりもかん水間隔を短くし、1回のかん水量も増やしましょう。

下旬から採種の交配期になります。採種を行う株は必ずつる下げを行い、かん水は控えめにしてください。

◆ デルフィニウム

沿海地域では3番花の出荷時期になります。気温が上昇してきますので、軟弱にならないよう昼間の換気は十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等も行いましょう。

◆ ホオズキ

8月出荷作型の植え付け期になります。萌芽時の生長点の焼けを防ぐため、マルチの穴あけは適期に行いましょう。気温が上昇しハウス内への害虫の侵入も多くなりますので、防虫ネットの設置やほ場周辺の防除に努めましょう。

◆ シキミ

雪害による被害程度がひどく主幹や主枝が折れ、切り戻しを行っている場合は、施肥等を行い、樹勢の回復と新梢の発生を促しましょう。一樹あたり5割以上の徒長枝が一度に折れている場合は樹勢が低下する恐れがありますので、施肥等により樹勢の回復を図りましょう。

また、倒木し、断根の程度がひどい場合は、引き起こし、支柱に固定し、整枝後に発根促進剤を施用しましょう。

改植するほ場については、今月が定植時期になりますので、育苗床から掘り上げた苗を乾燥しないように、できるだけ早く定植しましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

春先のこの時期は周期的に気温の変化を繰り返すことで、家畜が温度差によるストレスを多く受ける時期でもあります。昼間は暖かくなる日が多くなりますが、早朝や夜間は急激に温度が下がることもあります。子牛、子豚などの幼畜に対する防寒対策は引き続き徹底しましょう。哺乳時期の子牛の適温域（好ましい気温）13～25℃で、気温が5℃以下になると発育等に何らかの影響が出てくると言われています。牛舎内の子牛の高さに温度計を設置し、室温を適宜チェックするとともに子牛の健康状態を十分に観察し、保

温対策をこまめに行いましょう。また日中の気温の高い時間帯には、牛舎の換気を行うとともに、母牛と一緒に運動場で日光浴をさせましょう。

◆ 飼料作物

イタリアンライグラスは気温の上昇とともに生育旺盛となり、急速に伸び始めます。出穂も見られ青刈りでの給与も増えてきます。未熟堆肥や窒素質肥料を多く施用したほ場で生産された青刈りのイタリアンライグラス等では硝酸態中毒の恐れが懸念されます。近くの農業改良普及センターで硝酸態窒素の含有量を無料で調べることができます。牛に給与する前に硝酸態窒素の量を調べ適正な給与量について指導を受けましょう。

◆ 家畜防疫

最後に、県内で豚流行性下痢（PED）の発生が続いています。また3月に入っても「鳥インフルエンザ」の発生については注意しなければなりません。農場へのウイルスの侵入防止のために、車両（特に家畜運搬車両）や畜舎内の消毒、長靴の履き替え・消毒、踏み込み消毒槽の設置、畜舎周辺の石灰散布など飼養衛生管理基準の遵守を徹底しましょう。

（小坂 昭三）

特用作物

◆ 茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃になる頃を目安に実施します。整枝の高さは、葉層を8芽以上確保するように、去年の最終摘採面から3～5芽上げた位置として下さい。また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽にかからない高さで丁寧に整枝して下さい。

2 春肥・芽出し肥の施用

春肥は、早場地帯では3月上旬までに、遅場地帯では3月中旬頃までに施用します。また、芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性の肥料を施用します。

いずれも地域の施肥基準に準じて、うね間だけでなく株元近くまで幅広く散布し、流亡防止と分解促進のためにうね間を軽く攪拌します。

3 防霜対策

防霜を開始する時期は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、

春整枝した茶園では春整枝直後からとし、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施ます。

防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃とします。

スプリンクラーで防霜する場合は、摘採面の気温が2℃以下になったら散水を開始するようにして下さい。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除時期は2月下旬～3月上旬頃の春整枝後になります。地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるように散布して下さい。

5 定植

露地で育苗した苗の定植は2月下旬～3月中旬が適期ですが、ハウスなどの施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）の定植が良いでしょう。なお、ペーパーポット苗を定植する場合は、定植後の乾燥防止のためポットの上部が植穴より上に出ないように注意して下さい。

6 製茶機械などの点検・整備

異物混入防止や品質向上のため、茶工場内の清掃や製茶機械の事前点検・整備・調整を早めに実施しましょう。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 採取

五～七分開きの時期に傘の縁が巻き込んだ状態で、形状・色沢とも良好なものを採取します。

雨子(あまこ)での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になりますので、なるべく晴天を選んで日和子(ひよりこ)で採取しましょう。また、ほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないように丁寧に採取しましょう。

さらに、容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取したら、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぎましょう。特に雨子(あまこ)は素早く処理しましょう。

2 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定

とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げましょう。

3 収量アップ

防風ネットの設置や古ぼだ木への給水を行い、収量アップに努めましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、本畑作業の移植が主な作業となります。品質・収量の確保に向けて健苗の移植に努めましょう。

1 移植は、葉数が9～10枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）の白い根が肥土全体に覆っている根張りの良い苗を選んで行ないましょう。

葉数が少ない小苗を移植すると、本畑での活着と生長が遅くなり、また大苗では、本畑初期の低温による不時発蕾を招きやすくなります。

植穴は、深さ13～15センチ程度に揃えましょう。極端な深植え、浅植えは、初期生育が遅れ、不揃いの要因となります。また、移植の際は、抱土が露出しないよう注意しましょう。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因となります。

移植後は、移植苗の確認手直しを行ない、活着促進に努めましょう。

2 移植後の管理作業として、排水溝の完備を徹底し、生育不良、病害発生防止に努めましょう。黄斑えそ病の発生が懸念される場合は、防虫ネットの設置や共同防除に向けた話し合いを行い、発生防止に努めましょう。また、植付け穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収しましょう。

(井上 馨)

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なにに農業アラカルト

農地中間管理機構の設立

～所有から利用へ～

農業が持続的に発展していくためには、「人(担い手)」と「農地」が安定して確保されることが大切です。

しかしながら、農業就業人口は減少し続け、高齢者率も高く、農地を相続しても農業を継がない「土地持ち非農家」が年々増えている状況にあります。後継者がいないことに加え、昭和一桁世代の高齢農業者のリタイアが加速する中で、使われない農地が一気に増え、遊休化することが心配されています。

また、これまで農地の売買、貸借は個別相対で進められてきており、経営規模は徐々に拡大してきましたが、耕作する農地は分散して生産効率が悪く、担い手がこれ以上の農地は引き受けられないという状況も問題となっています。

今回、新たに農地中間管理機構（以下、機構）が各都道府県に一つ設置され、平成26年度からスタートします。「農地を信頼して預けられる中間的な受け皿組織があると、問題を解決しやすい」との意見を踏まえて、設置されるものです。

機構は、農地利用の効率化や高度化が図られる農地を取り扱うこととされており、農地の出し手から農地を借受け、まとまりのある形で担い手へ貸し付けます。農地の出し手と受け手の間に機構が入って、リース方式で担い手へ集約していく仕組みです。

機構は、公的な機関ですから、出し手側は農地を安心して預けられますし、受け手側はまとまった農地を貸してもらえ、必要があれば、整備した上で貸してもらえます。

また、出し手側の支援策として、地域でまとまって農地を機構に預ける場合には、預ける割合に応じて協力金（地域集積協力金）が地域へ交付されるとともに、経営転換や農業を辞められたりする個人にも協力金が交付されるなどの制度が設けられています。

一方で、各市町村では、誰が農地を担うのか、どのように農地を活用していくのかなどを地域で話し合っ、自ら地域農業の将来を描く「人・農地プラン」の作成活動が鋭意進められています。

農地は、先祖代々から引き継いできた大切な財産ですが、この財産をどの

ように守り、活かしていくのか、地域の皆さんで十分話し合っただき、
今後は、「相続から継承へ、そして所有から利用へ」を合い言葉に、地域で
頑張っていくという担い手へ農地を引き継ぐことを念頭に、市町村や農業委
員会、そしてJAや各関係機関との連携の下、今回新しくできる機構の仕組
みや各種の支援策を活用していただきたいと思います。

(宮崎県地域農業推進課・連携推進室)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時に発生がなくても本田で早期に発生する恐れがあるので、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	並	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。 1月下旬調査では用水路での生貝率が高かったため、水の出入り口にネットを設置する等して侵入を防ぎます。
施設野菜類	病害全般	—	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、今後は夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日は施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病 黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ類	並 やや多 並 やや少 前年、前々 年より多い 並 並	いずれの病害も多発すると防除効果が上がりにくいので予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するアザミウマ類、コナジラミ類などの微小害虫に対しては、抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に粒剤を施用し、害虫類の防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや多 並 前年、前々 年と同程度	斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	アザミウマ類 タバココナジラミ類	やや多 やや少	両害虫とも、今後暖かくなるにつれて増加する恐れがあります。特にアザミウマ類の発生が多いところでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ類	並 やや多 前年、前々 年と同程度 並	葉かび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、早期に根ごと抜き去り適切に処分するとともに、媒介虫であるタバココナジラミ類の防除も徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病 ハダニ類 アブラムシ類	並 やや多 やや多 やや多	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうち定期的に防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
カンキツ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 並 やや少	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 生育密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部ややすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するようていねいに防除します。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。